

て、さらには国際的な環境問題の解決方法として、どのように里山保全が機能するかを、国をあげて証明しなければならないだろう。

本書の最後で武内が里地の保全に関して「長期的な戦略」の必要性を述べているが、それは里山や里地に限ったことではなく、自然保護や環境保全を行う活動全体にとって息の長い取り組みとして行い、地域の理解と住民参加によって成熟させて行くことが必要である。長期的なスパンで保全を行うには、研究者だけでなく、実際に活動を行う多くの市民に注目されることが必要である。したがって本書は、里山活動を既

に始めている市民や、これから始めようとしている市民に読まれ、保全活動の現場で積極的に生かされることが必要である。

文 献

杉谷隆 2001. 里山. 千田稔・前田良一・内田忠賢編『風景の事典』, 古今書院, pp.174-177.

全国雑木林会議編 2001.『現代雑木林事典』, 百水社.

(瀬戸 寿一)

Romsics Ignác, A Trianoni Békeszerződés

(ロムシシュ・イグナーク『トリアノン講和条約』)

Osiris Zsebkönyvtár, 2001, 246p.

ハンガリーの歴史学者ロムシシュ・イグナークのトリアノン講和条約に関するハンガリー語の新刊書である。トリアノン条約についての論文・著書は、この国ではこれまで数多く発表されていて、このテーマの研究書が今回とりわけ珍しいというわけではないが、246ページというコンパクトな分量で、かつ非常に分かりやすくこのように総合的にまとめられている本はあまりない。ハンガリーの抱える領土問題やハンガリー人マイノリティーに関する地政学的な問題の研究に着手するのに際して、この本を初めに読むことは非常に有益であると思う。

著者ロムシシュ・イグナークはハンガリーのEötvös Lóránd (エトボーシ＝ローランド大学; 通称ブタペスト大学) の近代ハンガリー史を専門にする50代前半のハンガリーでは新進気鋭の研究者である。彼はアメリカのインディアナ大学やブローミング大学などに招かれて5年ほど客員教授を経験している。社会主義体制のもとでは、ハンガリーの大学のほとんどはモスクワ大学など東欧圏、社会主義諸国の大学や科学アカデミーなどとの交流を主にしていたが、冷戦終結後はこのように西側の大学との研究交流が盛んになってきている。とりわけ東欧研究が盛んなロンドン大学や、ハンガリー動乱など

によって逃れた研究者が多くいるアメリカの大学との研究交流が非常に盛んである。自由な思想状況下で書かれた本書には、新しい斬新な見解をみることができる。社会主義体制下のハンガリーでは、トリアノン条約に関しては隣接する社会主義諸国の民族問題にも触れる微妙な問題をはらんでいたために、いわばタブーの領域とされていた。この意味で本書はハンガリーにおいても画期的な本なのである。

トリアノン条約を話題にするとき、多くのハンガリー人が強い民族的思い入れを示す。ハンガリーが現在政治的に抱える大きな問題の1つは、日本ではほとんど知られていないが領土問題、そしていわゆる国境外に居住する数多くのハンガリー人問題なのである。トリアノン講和条約とは、第一次世界大戦後の1920年に連合国と、当時のハンガリーとの間で結ばれた講和条約のことである。当時ハンガリーはまだ王国で、同盟国としてオーストリア＝ハプスブルグ帝国とドイツ枢軸国側にたって参戦したために、戦後は敗戦国となった。その後、ハンガリーはこのトリアノン条約の国境線の確定により、推定300万人のハンガリー人が国境外に居住することになり、それが基本的に現在まで続いている。当時のハンガリー王国は、スラブ系

のスロバキア、クロアチア、セルビア、ウクライナ人とラテン系のルーマニア人が領内に混在する、いわゆる多民族国家であった。ハンガリー人はこのスラブ系にもラテン系にもサクソン系にも属さず、ウラル山脈の西側を源郷とする東方のウラル系エスニシティーで、アジア系非ヨーロッパ言語を使用し、ヨーロッパ大陸ではフィンランド人とエストニア人とだけ起源を同じくするエスニシティーである。

この講和条約では、ウィルソン流の民族自決を原則とした領土修正が行なわれ、それにより旧ハンガリー王国領土の3分の2が切り取られることになった。しかしハンガリー民族自身も数多く領内に分散して居住していたために、当時の人口の半分近い300万近くがこれ以後国境外に取り残されたのである。敗戦国であったためにハンガリーには発言権はほとんどなく、ハンガリー国民にとっては非常に不利な国境線確定が行なわれたともいえる。ハンガリーは現在でも人口が1000万人弱しかない小さな国であるために、300万という数はハンガリー民族の3分の1にも及ぶ大きな数でもあり、現在でもハンガリーにとってこれは大きな問題なのである。しかし、このような大きな問題も具体的な解決のめどは現在でもほとんどたっており、周辺諸国との関係もあって具体的な領土問題としては現状では提起できない状態にある。とりわけ現在のルーマニア領のカルパチア地域は、歴史的にもハンガリー人がもっとも多く居住していたため、領土修正を一番強く要求したい地域であり、社会主義体制下でもルーマニアとハンガリーの関係は微妙で、紛争防止のためにソ連軍がハンガリーとルーマニアの国境地域に基地を置いて監視していたという歴史的事実さえもある。政治家や大臣の執務室には、どこの国でも大体その国の地図が掲げられているものであるが、ハンガリーの大臣室には現在の縮小されたハンガリーの地図ではなく、ハンガリー王国時代の地図である現在のスロバキア全土、ルーマニア西部、セルビア北部、クロアチア全土、ウクライナの西南部が含まれたマジャール王国（ハンガリー人は自分たちのことを現地語でマジャールという）の領土地図が堂々と掲げ

られているのをテレビなどでよく目にする。周辺国にとっては非常に不愉快で、挑戦的な地図が大臣室に堂々と掲げられているのを見ると、ハンガリーの領土修正に対する並々な執念がうかがえる。このように領土問題に関して、この国は対外的にはもの静かだが、対内的には強い主張がくすぶっているし、現在では学校の歴史教育においてもトリアノン条約にかなりの時間が割かれているようである。

この著書は当然のことながら、ハンガリー人の立場からの解釈になっているが、客観的な史実はしっかりと踏まえてある。9つの章からなっており、まず、第1章は「20世紀初めのオーストリア・ハンガリー二重王国時代の人々と国家について」という題で、ハンガリー王国時代の地図とオーストリア＝ハプスブルグ帝国時代のボヘミア、モラビアなどの地方16州を含む詳細な地図を使って、民族の分布、言語・宗教の構成、当時のハンガリーとオーストリアの関係などについて詳細に解説されている。この地図を見ると当時のオーストリア・ハンガリー二重王国は計12の民族が入り交ざった多民族国家であったことがわかり、現在も民族問題を抱えるユーゴ諸国の半分近くもハプスブルグ帝国領であった。多民族国家の一つのモデルとして、ハプスブルグ帝国がしばしば引き合いに出されるのもうなずけると思う。

第2章は「第一次世界大戦の目的」で、ハンガリーが第一次世界大戦に参加するまでの経緯、そして戦後の周辺諸国（ルーマニア・スロバキアなど）のハンガリーに対する領土要求に対する詳細な地域別の地図が載せられている。また講和会議を率いた各戦勝国による領土修正要求の違いについても、地図で詳細に解説されている。特に興味深いのは、ルーズベルトのアメリカ合衆国がハンガリーに対して、最も柔軟な領土修正要求をしていたことである。ロイド・ジョージの大英帝国も比較的温情的であり、一番手厳しい領土修正要求をしたのがクレマンソーのフランスであった。ハンガリーを占領していたのも主にフランス軍であったため、講和会議においてはフランスの発言権が非常に強く、このためフランスの修正条項に近い要求

が採択され、領土修正がなされて現在に至っている。このため、現在でもフランスを快く思わない政治家もハンガリーには多い。第3章は「ハンガリーの歴史的解体」で、1918年から1919年までのまだ正式に講和条約の領土修正条項が施行される以前の、戦後の次々と各民族が独立していった混乱期のハンガリー領土の状態について述べられている。第4章は「講和会議での領土修正会議と提案」という題で、特に周辺諸国のスロバキア、ルーマニア、セルビアとの領土修正問題について述べられている。特にこの章では戦勝国ルーマニアのハンガリーに対する領土要求について詳細に解説されており、鉄道に沿った地帯の領土要求がなされたことが理解できる。ルーマニアに割譲されたカルパチア山脈を中心とする地帯はトランシルバニア公国領として、ハンガリー王国が古くから統治していた領域であったため、数多くのハンガリー人が居住しており、現在でも国境外居住ハンガリー人の数はこの地域が最大である。スロバキアの要求は実現しなかったが、オーストリアとの国境線の領土を強く要求しており、同じスラブ民族であるクロアチアまでの回廊線を構築していた意図が分かる。この時、スロバキアに併合されたドナウ川沿いにも多くのハンガリー人が居住していたため、現在でも少数民族問題を抱える地域になっている。この周辺諸国の当時の領土要求を見ると、現在のハンガリーをさらに小さくした領土修正要求になっていることが分かり驚かされる。

第5章は「平和会議とハンガリーソビエト共和国」で、第一次世界大戦後にできた社会主義政権の南スロバキアでの領土回復の軍事的動きと、オーストリアとハンガリーの国境線修正前と修正後の詳細な地図とともに説明がなされている。これによると同じ敗戦国でありながら、多くの領土がオーストリア側に割譲されたことが分かる。現在でもハンガリーに接しているオーストリア領域にも多くのハンガリー人が居住しており、冷戦時代には多くのハンガリー人が共産主義者として差別されるのを恐れて、名前をドイツ語名に変えたが、社会主義体制が崩壊した現在においては、再びハンガリー名に改

めるハンガリー人も多くなっているということである。第6章は「ハンガリー講和会議代表団とその活動について」で、具体的なハンガリー代表団の各国との微妙な外交活動の様子について書かれている。特に最初はアメリカ、イギリスに修正条件緩和を求める外交を展開したが、後には発言権が強くなったフランスへのアプローチを重視するようになったとの指摘があって興味深い。第7章は「条件変更の試み」と題され、特にハンガリー人が多く居住していたルーマニア領カルパチア地域、ドナウ川沿いの南スロバキア地域、セルビア北部のヴォイヴォディナ地域の割譲をめぐるフランスとの交渉で、ハンガリーが強く抵抗したことが地図を用いて詳細に論じられている。

第8章は「平和条約の調印、批准、執行」で、この章では批准にいたる経緯のみでなく、トリアノン条約調印後、いったんはオーストリアに割譲されたが、イタリアと協商国の後押しで行なわれた住民投票によってハンガリーへ再び帰属することになったブルゲンランド地方のショプロンの町の出来事について、多くのページが割かれている。この土地はトリアノン条約で失った領土で、ハンガリーが現在までに取り戻した唯一の領土である。有名な忠誠の門 *Hűség kapu* があり中世の面影を数多く残し、オーストリア国境から6キロのところに位置する美しい町である。第9章はエピローグで、地図と図表を使って、周辺諸国に分割された領土の面積と人口が解説されている。

このように、ハンガリーにおいては領土回復の問題はもっとも大きな国家的課題の1つであり、現在はEU加盟がハンガリーにとって最大の課題と考えられているが、領土問題が国家的な課題であることは、EUに加盟しても恐らく変わらないであろう。冷戦構造解消後、新しい民族主義的な動き(MIÉPを代表する右翼政党の強まりなど)も出てきているが、ハンガリーの領土問題と中央ヨーロッパ・東ヨーロッパにおけるハンガリー人マイノリティの問題は、今後も注目され続けなければならないであろう。最後に、この問題に関連したロムシシュ・イグナークが書いたいくつかの代表的な

文献（英語を含む）を挙げておく。

Ignác Romsics. 1992. Amerikai béketervek a háború utáni Magyarországról (戦後のハンガリーに対するアメリカの戦略). Gödöllő: Typovent

Ignác Romsics. 1996. Helyünk és sorsunk a Duna-medencében (ドナウ盆地における我々の場所とライン). Budapest: Osiris Kiadó.

Ignác Romsics. 1997. Nemzet, Nemzetiség és állam (国, 民族, 国家). Budapest: Napvilág Kiadás.

Ignác Romsics. 1998. Trianon és a magyar politikai gondolkodás 1920–1953 (ハンガリーの政治を考える1920–1953). Budapest: Osiris Kiadó.

Ignác Romsics, and Béla K. Király, eds. 1999. Geopolitics in the Danube Region. Hungarian Reconciliation Efforts, 1848–1998. Budapest: Central European University Press.

Ignác Romsics. 2000. Magyarország-Története-XXX. Században (ハンガリー-20世紀の歴史). Budapest: Osiris Kiadó.

(水谷 剛)

鄒 振環『晚清西方地理学在中国 —以1815年至1911年西方地理学訳著的伝播与影響為中心』

(『清末中国における西洋地理学 —1815年から1911年までの西洋地理学の訳著書の伝播と影響を中心として—』)

上海古籍出版社 2000年 445 p.

本書は、清末における西洋地理学の訳著書の出版状況、およびそれらの出版物による西洋の地理的知識の中国への伝播の過程を検討し、近代中国の地理思想史を考察した良書である。

1990年代から、中国内外の研究者によって、近代中国の思想史や文化交流史の研究が盛んになってきているが、地理思想史に関する研究はこれまで少なく、その意味でも本書は注目に値する。

著者の指導教授である周振鶴による序文、著者によるあとがき、および復旦大学のホームページによると、本書は著者が1998年に復旦大学に提出した博士論文に修正を加えて出版されたものであることがわかる。現在、著者は復旦大学歴史系の副教授で、主に近代中国の地理思想史、出版史、学术交流史について、多くの著書や論文を発表している研究者である。

本書は、6章にわたる論考の部分と巻末の豊富な資料部分からなっており、そのコンパクトな外見とは裏腹に、蓄積の少ない清末中国の地理思想史に関する貴重な研究書であるといえる。

まず、序章においては、本書の研究範囲や研

究手法の説明、先行研究の検討、および各章の概要が整理されている。本研究の意義、先行研究の概説の部分は、要領よくまとめられており、評者のように思想史研究を専門としていない者にも理解しやすい。ただ、西洋から新しく伝来してきた知識の断片が蓄積されることによって、社会の中で、一連の知識のつながり、さらには知の体系が形成されていくという本書における著者の視角と方法論の説明 (p.11-12) は、本書が単なる史料紹介の文献ではなく、ある時期のある社会における思想の形成過程を明らかにしようとする研究書であることを示す重要な部分であるから、関連文献を引用するなど、より詳細な説明が欲しいところである。

第1章「明末清初における漢語編訳された西洋の地理学文献と新しい知識の導入」においては、本書で主に議論される清末の状況の前提となる、明末清初 (16世紀末～17世紀) の西洋地理学文献の漢語への編訳に関して、多くの先行研究が引用され概要が説明されている。マテオ・リッチの『坤輿万国全図』、G. アレニの『職方外紀』、F. フェルビーストの『坤輿全図』など、イエズス会宣教師による著作が、出版さ